

『源氏物語』における中国の美人たち

西田 禎 元

以前、『源氏物語』（以下『源語』と略記）に影を落としている中国古代の女性たちについて、少しく述べる機会があった。⁽¹⁾

その折に紹介した女性は、漢の高祖の寵妃であった戚夫人与、漢の武帝の愛妃であった李夫人の二人であった。

本稿では、美人として名高い王昭君（B. C. 33年ごろ、漢の元帝の宮女）と、楊貴妃（719～756年、唐の玄宗帝の寵妃）に触れてみたい。

この二人は、西施（B. C. 5世紀ごろ、春秋時代の越王句踐の侍女）や貂蟬（192年没、後漢時代の司徒王允の養女）と並んで、中国の四大美人に選ばれている。⁽²⁾

西施や貂蟬が半ば伝説上の人物であるのに対して、昭君と貴妃は正史にも名を連ねている女性である。戚姫や李姫同様、『源語』の作者は、先ず歴史のヒロインたちに思いを馳せた。

〔I〕 王昭君

王昭君の履歴は、『漢書』や『後漢書』に記されている。

①竟寧元年春正月、匈奴呼韓邪単于来朝。

詔曰「（中略）呼韓邪単于不忘恩徳、郷慕礼義、復修朝賀之礼、（中略）賜単于待詔掖庭王嬙為闕氏。」⁽⁴⁾

②竟寧元年、単于復入朝、礼賜如初、（中略）単于自言願婚漢氏以自親。元帝以後宮良家子王嬙字昭君賜単于。単于歡喜、上書願（中略）休天子人民。⁽⁵⁾

③王昭君号寧胡闕氏、生一男伊屠智牙師、為右日逐王。呼韓邪立二十八年、建始二年死。（中略）呼韓邪死、雕陶莫皋立、為復株余若鞮単于。（中略）復株余単于復妻王昭君、生二女、長女云為須卜居次、小女為当于居次。⁽⁶⁾

④昭君字嬙、南郡人也。初、元帝時、以良家子選入掖庭。時呼韓邪来朝、帝勅以宮女五人賜之。昭君入宮數歲、不得見御、積悲怨、乃請掖庭令求行。呼韓邪臨辞大会、帝召五女以示之。昭君豊容靚飾、光明漢宮、顧景裴回、竦動左右。帝見大驚、意欲留之、而難於失信、遂与匈奴。生二子。及呼韓邪死、其前闕氏子代立、欲妻之、昭君上書求帰、成帝勅令従胡俗、遂

復為後单于闕氏焉。⁽⁷⁾

①には、竟寧元年（B. C. 33年）に来朝した匈奴王の呼韓邪に対し、漢の元帝（第八代皇帝）が、恩徳を忘れず、礼義を尽くした王に、後宮に仕える王嫱（王昭君）を与え、王の妻とする、ということが記されている。

ここには、ひたすら漢朝に恭順の姿勢を示している呼韓邪单于の姿が見られる。

②には、呼韓邪みずからが漢氏の女婿となり親善を尽くすことを願ったので、元帝が後宮に仕える良家出身の王昭君を呼韓邪に与えたということが記されている。

①と殆ど同じ内容であるが、呼韓邪が漢朝との血縁を積極的に願っていることがわかる。

③には、王昭君が呼韓邪の妻となって伊屠智牙師という男子を出産したこと、夫の呼韓邪が死去したこと、後継者には、すでに妻になっている大闕氏の長男である雕陶莫舉が選ばれ復株余若鞮单于と名告ったこと、その新单于が未亡人である王昭君を妻とし、二人の娘が生まれたことなどが記されている。

大闕氏は呼韓邪の腹心の部下であった左伊秩督の姪であり、姉の顓渠闕氏は、呼韓邪の第一夫人である。顓渠には二人の男子がいたが、いずれも雕陶より年少であり、姉の勧めもあって、妹の長男が新单于になったのである。

④は『後漢書』の記事であり、①～③の『漢書』の記事と異なっている点も見られる。

先ず、呼韓邪が五人の宮女を賜ったこと、五人の中に、みずから願い出た王昭君がいたこと、彼女が二人の子を生んだことなどが、おもな相違点であろう。

ところで、『漢書』には見られなかった王昭君の美の形容が、『後漢書』には「豊容靚飾、光明漢宮」と記されていた。彼女の美しい存在を知った元帝が、彼女を後宮に留めておきたいと思う記述とあわせて、正史に記された王昭君の美人説話の嚆矢であろうか。

美人説話の類は、『西京雜記』（漢代の劉歆？、晋代の葛洪？）や、『世説新語』（南北朝、劉義慶）や、『周秦行紀』（唐代の韋瓘）等の説話や伝奇に数多く記されている。

「後宮第一善應對拳止閑雅」〈西京⁽⁸⁾〉、「姿容甚麗」〈世説⁽⁹⁾〉、「柔肌・穩身、貌舒態逸、光彩射遠近」〈周秦⁽¹⁰⁾〉といった美の形容が散見される。

そこには、王昭君の容姿の美しさとともに立ち居振る舞いの上品さが描かれている。〈後宮第一〉と記されているところに、元帝の無念さがうかがわれるようである。

さて、このような王昭君の存在を、『源語』の作者は、どのように捉えていたのであろうか。物語は三例ほどの記述を示している。

①むかし胡の国につかはしけむ女をおぼしやりて、ましていかなりけむ、この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむこと、など思ふもあらむ事のやうにゆゝしうて、霜ののちの夢と誦じたまふ〈3-118~9 べ⁽¹¹⁾〉

②長恨歌、王昭君などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、事の忌みあるは、こたみは奉らじ、と、えりとよめたまふ〈4-34~5 べ〉

③昔おぼゆる人形をもつくり、絵にもかきとりて、行ひはべらむとなむ思うたまへなりにたる、と宣たまへば、あはれなる御ねがひに、(中略)こがね求むる絵師もこそ、など、うしろめたくぞはべるや
〈11-208~9ペ〉

①は「須磨」の巻の記事で、京の都から須磨の地に落ちていった光源氏(以下「源氏」と略記)が、家に残してきた紫の上を偲んでいる段である。

側近の良清には歌をうたわせ、惟光には横笛を吹かせながら、源氏は琴を弾く。〈琴(きん)〉とは中国伝来の楽器で、〈箏(そう)〉とは異なり、琴柱が無く、弦の数も七本である。

胡の国(中国漢帝国の北方の国)に嫁がされた女人を思いやるよすがにもなった楽器の記述である。琴を奏でながら、源氏は、遠く胡の国に流れていった、元帝の宮女王昭君を思い起こす。

そして、愛する女人を遠い辺塞の地に離してしまった元帝に、深い同情を示すのであった。昭君への思いは、愛妻紫の上への思いであり、元帝への思いは、そのまま自分への思いである。

「ましていかなりけむ」は、源氏と王昭君の対比でもなく、また源氏と元帝との対比でもなく、元帝と源氏との対比である。

すなわち、元帝と王昭君の深い悲しみを思いやるにつけても、自分と紫の上が、このまま永遠に離れてしまったなら、その悲しみはいかばかりであろうか、というのである。そうした不安が「ゆゝしうて」なのに違いない。

①に続く後文には、「念誦などしたまふ」〈3-119ペ〉源氏の姿さえ描かれる。心の支えを必死に求める源氏なのである。

源氏はまた、「霜ののちの夢」と、『和漢朗詠集』の詩句を口ずさむ。それは、「王昭君」と題された大江朝綱の七言律詩の一句であった。

翠黛紅顏錦繡粧	泣尋沙塞出家郷
辺風吹断秋心緒	隴水流添夜淚行
胡角一声霜後夢	漢宮万里月前腸
昭君若贈黄金路	定是終身奉帝王 ⁽¹²⁾

源氏が口ずさんだ一節は、胡人の吹く角笛の音が聞こえると、霜夜の夢も破られ、遙か万里の漢朝の都が偲ばれてならない、といった趣きであり、まさに、管弦の遊びの中で都を思う主人公の心境に重なる。

ところで、この詩の第七句には、「黄金路」とあり、画工〈毛延寿〉関係の物語がうかがえる。毛延寿に関する記述は、正史にはなかった。『西京雜記』(漢代もしくは晋代)等に記されている話である。

元帝後宮既多不得常見乃使画工図形按図召幸之諸宮人皆賂画工(中略)王嬙(王昭君のこと、筆者注)不肯遂不得見後匈奴入朝求美人(中略)上案図以昭君行(中略)乃窮案其事画工皆棄市(中略)画工有杜陵毛延寿⁽¹³⁾

画工の毛延寿に、賂を贈らなかった昭君は、醜く描かれてしまい、匈奴王からの求婚の折に、元帝は、宮女たちの肖像画のみを資料に

して、醜く描かれた昭君を選んでしまったのである。

実際には、彼女が後宮第一の美人であったので、画工の毛延寿たちは全員死刑にされたという。

前に紹介した朝綱の「王昭君」は、この毛延寿への〈贈賂説話〉の悲劇をも詠っていた。

さて、王昭君説話における贈賂のテーマは、本国の詩人たちの関心事でもあった。幾つかの作品例を次に示そう。

王昭君 李白⁽¹⁴⁾
漢家秦地月 流影照明妃

(中略)

生乏黄金枉图画 死留青塚使人嗟

王昭君(一) 白居易
滿面胡沙滿鬢風 (中略)
愁苦辛勤憔悴尽 如今却似画图中

王昭君(二) 白居易
漢使却廻憑寄語 黄金何日贖蛾眉
(後略)

昭君怨 白居易
(前略) 見疎從道迷图画
(中略) 不須一向恨丹青

明妃曲 歐陽永叔⁽¹⁵⁾ (北宋)
(前略) 雖能殺画工
於事竟何益 (中略)
漢計誠已拙 女色難自誇

明妃曲(一) 王介甫 (北宋)

(前略) 尚得君王不自持
婦來卻怪丹青手 入眼平生未會有
意態由来画不成 當時枉殺毛延寿

歐陽永叔や王介甫は、大江朝綱や紫式部より後の人であるから、『朗詠集』や『源語』に引かれた毛延寿説話は、前述の『西京雜記』や、李白、白居易の詩などによるものであったに違いない。

王昭君説話に取材した漢詩は、わが国の『文華秀麗集』⁽¹⁶⁾ (818年ごろ)にも収められているが、それら五篇には、毛延寿関係のことがらは詠われていない。

五篇すべてが、長安の都を去り胡国に赴かざるを得ない悲愁や、困難をきわめた旅の様相、胡国での侘しい生活と望郷の思いなどを詠じている。

五言律詩五篇の中で、〈胡〉、〈遠〉、〈塞〉、〈愁〉といった文字が目立ち、次いで〈長〉、〈関〉、〈行〉、〈歳〉、〈山〉、〈風〉の文字が目につく。

〈長〉や〈歳〉には、〈長安〉や〈年齢〉の用例も見られるが、関山を越え、寒風に吹かれながら、遠く塞外の地にある胡国に嫁いで行った、昭君の愁いに沈んだ歳月が、共通の主題になっていることに変わりはない。

『文華秀麗集』の王昭君楽府は、正史や『文選』(南北朝)所収の詩篇をふまえたものであるのかも知れない。

さて②の記事であるが、これは主上の前で行われる物語や詩歌に取材した絵画の〈合わせゲーム〉の場面である。

弘徽殿の女御(権中納言の娘)を後見する

権中納言側に対して、斎宮の女御（六条御息所の娘）を後見する源氏側は、異国の詩に取材した〈長恨歌絵〉や〈王昭君絵〉を出品しようとした。

しかしながら、縁起が悪いということで取りやめる。両者に描かれた詩や物語のテーマは、主人公たちの悲劇である。一人は、愛する皇帝の指示で殺され、もう一人は、愛する皇帝によって蛮国に嫁がされる。

ヒロインたちの生涯は、たしかに興味深く情趣もあるが、帝の前で催される絵画競べとしては、ヒロインたちの運命の悲劇性と皇帝の関りからして、やはりふさわしくない。源氏側は、結局これらの絵を出品しなかった。

ところで、王昭君の生涯について、次のような稗史が伝えられている。

昭君有子曰世遠。单于死、世遠繼立。凡為胡者、父死妻母。昭君問世遠曰、汝為漢也、為故也。世遠曰、欲為胡耳。昭君乃吞藥自殺。〈『琴操』⁽¹⁷⁾（後漢代、蔡邕）〉

匈奴王呼韓邪单于の妻として胡地に赴いた後の物語である。昭君は夫に死なれ、わが子世遠の妻になるという胡地の風習を忌み、自ら命を断った。

この話は、『漢書』などの正史に記される、先妻の子との再婚ということがらと違っている。昭君の悲劇性を更に強調したのが、『琴操』の伝える物語である。父と子の二人に嫁したということがらは、石季倫（三国時代～晋代）の「王明君詞」⁽¹⁸⁾にも詠われている。

父子見陵辱 对之慙且驚 殺身良不易
 默默以苟生 （中略） 伝語後世人
 遠嫁難為情

石季倫は、『漢書』が完成した後漢時代以後の人である。とするならば、ここに詠う「父子」は、『漢書』に記される〈呼韓邪〉と〈復株彘若鞮〉の親子であり、子の方は昭君の実子でない。昭君の子は〈伊屠智牙師〉である。

『琴操』で自殺したのも、実子との婚姻を忌避したためであり、「王明君詞」で、慙じながらもこらえ生きたのは、先妻の子との婚姻だったからである。

最終句の「遠嫁難為情」が、胡地における王昭君のテーマであり、作品の主題でもあった。

さて、次に③の記事を見てみよう。これは、「こがね求むる絵師」とあるように、①の記事について検討した毛延寿説話をふまえた記述である。

こうしてみると、『源語』の作者が受容した王昭君物語のテーマは、悪徳絵師の欲望ゆえに、都を遠く離れた蛮国で、生涯を全うせざるを得なかった王昭君の悲劇にあったといっ

てよい。王昭君の存在を確認した元帝の寵愛も時すでに遅く、二人は漢土と胡地に離別する。この離別の悲哀は、『源語』における、源氏と紫の上の別離に重なる。ただ、『源語』の場合、都を去ったのは男性である源氏の方である。

王昭君も源氏も、主人公という点では共通

している。離別の悲しみとともに、望郷（都や、都に住む愛する人を偲ぶ）というテーマもまた共通している。

更に、毛延寿に相当する悪役は、弘徽殿大后側の権力であるともいえよう。①の記事における「ゆゝしうて」には、敵対する権力の影を意識しての不安に違いない。

ともあれ、『源語』の構想の一つに、中国の史実をふまえた説話や詩篇を通しての影がくっきりと見えることは明らかである。

①の記事が、歌や物語の季節としては珍しい「冬」を背景にしているという手法も、王昭君の物語を思いやるとき、十分に納得できる。

すなわち、胡地における冬の厳しさを思いやっつてのものであろう。①の記事の前に、
冬になりて雪ふりあれたる頃、空のけしきもことにすごくながめたまひて、琴を弾きすさびたまひて、(中略) 涙をのごひあへり <3-118 べ>

とある。

李白の詩における「雪作花」の世界なのである。都落ちの春の季節といい、琵琶や胡角や琴や横笛による、楽の音の哀切きわまりない趣きといい、王昭君物語と『源語』須磨の巻の関りは密である。

『源語』の作者は、主人公における漂泊・籠居の物語に、本朝の〈貴種流離譚（在原業平や菅原道真に代表されるエピソード）〉や、唐土における、美人辺塞説話とでもいうべき構想を取り入れたのであろう。

〔II〕 楊貴妃

楊貴妃の履歴を、『十八史略』にたずねて

みよう。

①四載、以楊大真為貴妃。故蜀州司戸玄琰女也。為上子寿王妃十年矣。上見其美、令自以其意乞為女官、且為寿王別娶、而後納之。遂專寵。〈卷五唐玄宗⁽¹⁸⁾〉

②六載、以祿山兼御史大夫。祿山請為楊貴妃兒。(中略) 祿山入朝。楊釗兄弟姉妹、皆往戲水迎之。釗貴妃之從祖兄也。得出入禁中。(中略) 賜釗名国忠。〈卷五唐玄宗⁽²⁰⁾〉

③十載、(中略) 上日遣諸楊与之遊。(中略) 祿山入禁中、先拜貴妃。上問其故。曰、故人先母而後父。(中略) 貴妃以錦繡為大襪襪、使宮人以綵輿舁之。(中略) 左右以貴妃洗祿兒對。上賜妃浴兒金銀錢、(中略) 自是出入宮掖、通宵不出、頗有醜声聞于外。上亦不疑。〈卷五唐玄宗⁽²¹⁾〉

④十五載、(中略) 賊遂入闕。上出奔、次于馬嵬。將士飢疲、皆憤怒、殺楊国忠等、及逼上縊殺貴妃、然後發。〈卷五唐玄宗⁽²²⁾〉

楊貴妃は蜀州（四川省）の出身で楊玄琰の娘である。

①には、天宝四載（745年）の出来事が記されている。この年、玄宗皇帝（685～762年）の寵をうけ、太真宮にいた楊太真が、女官の最高位（皇后の次の位）である〈貴妃〉の称号を賜った。楊貴妃、二十七歳の七月である。

彼女が初めて玄宗に召されたのは、五年前の寒い季節であった。その時玄宗は、冬の離宮で名高い驪山の温泉宮（華清宮）に滞在し

ていた。当時、玄宗の第十八子寿王瑁の妃であった楊玉環は、主宰者の命に逆らうことが出来ず、華清宮で浴を賜った。白居易の「長恨歌」によれば、

春寒賜浴華清池（中略）始是新承恩沢時⁽²³⁾である。

玉環が寿王の後宮に入ったのは、開元二十二年（734年）⁽²⁴⁾であろうから、更に六年前に遡り、彼女は十六歳ということになる。成人して間もなくの頃であったろう。

①の記事には、「寿王妃十年」とあるので、寿王妃になった年は開元二十三年なのかも知れない。

初めて寵をうけた後、玉環は女道士として太真宮に入り、楊太真と号した。かくして五年、貴妃として玄宗最愛の寵妃となった。

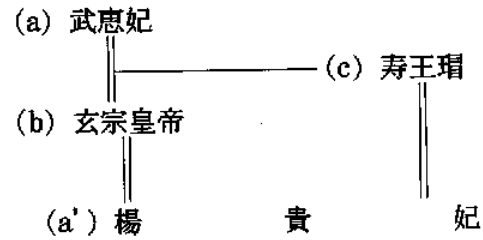
ところで、楊貴妃は、玄宗の前妃で寿王の母であった〈武恵妃〉の形代としての存在でもある。すなわち、三年前の開元二十五年（737年）に最愛の武恵妃に死なれた玄宗は、彼女に代わるべき妃を求めていたのである。

「長恨歌」の「多年求不得」は、この辺の経緯も含んでいるに違いない。

そうした眼鏡にかなったのが、当時の楊玉環だったのである。もしかしたら、玉環は、武恵妃に似た感じの女性であったのかも知れない。

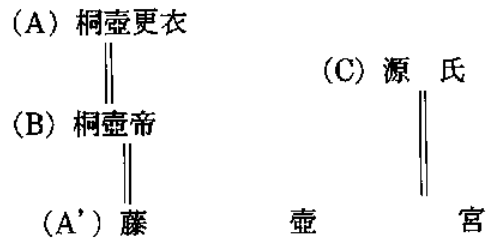
唐代の伝奇『長恨伝』（『長恨歌伝』ともいう。806年、陳鴻）には、「如漢武帝李夫人」⁽²⁵⁾（漢の武帝妃であった李夫人のようである）と記している。

四人の人物関係を示すと次のようになる。



(b) の立場からすると、愛妃 (a) の形代としての寵妃 (a') であり、(c) の立場からすると、母親 (a) に似通う妃 (a') という図式である。

この図式は、『源語』における、次の人物関係に重なっているといえないであろうか。



愛妃 (A) の死後、(B) は (A) に似ている (A') を新たな妃に迎えた。(C) は亡き母に似ていると噂される (A') を慕う。

両者の人物設定の違いが一つだけある。唐土の史実は、父帝が子の妃を奪い、本朝の物語は、子が父の妃と密通する。

ここにも又、中国故事の『源語』への影響がはっきりと見てとれる。と同時に、紫式部における〈歴史離れ〉(故事離れ)の意志も読みとれるのである。

②には、安祿山 (? ~ 757年) をめぐることがらと、楊貴妃のマタイトコである楊釗（楊国忠、756年死去）の出世のさまが記されている。

天宝六載（747年）、入朝し玄宗に恭順を誓った安祿山が、名目上、楊貴妃の子供になった。これは、後に引き起こす長安攻略への布石でもあった。

四年後のことがらを叙した③には、②に繋がる内容、すなわち安祿山と楊氏一族との交遊や、貴妃の子供として戯れている祿山の奇行が記されている。襪襪をして貰ったり、産湯と称して身体を洗って貰っている「体肥大⁽²⁶⁾」の祿山の姿は、どうみてもグロテスク以外の何物でもない。

それにしても、される者のみでなく、する者の姿も奇異といわざるを得ない。

かくして、祿山は、貴妃の住む後宮にも自由に出入りするようになり、二人の醜聞も流れた。しかし、母子（？）二人の奇行は、父（？）をして疑わしめなかったのである。

④には、いわゆる安祿山の乱と、それに続く、貴妃の縊殺に到る経緯が記されている。乱の起こりは前年（755年）の冬で、貴妃が死んだのは翌年の天宝十五載（756年）である。時に楊貴妃三十八歳の夏であった。

この楊貴妃の波乱に満ちた生涯は、美人悲劇（佳人薄命）の物語として、わが国にも感動的に受け容れられた。

殊に『源語』の作者は、中国の史書や詩文にも造詣が深く、己が大作の基本構想に、玄宗皇帝と楊貴妃の〈ラブロマンス〉を詠じた白居易の「長恨歌」の主題を鑲めた。

その詳細については、他の機会に述べることにするが、あらかた触れるだけでも、『源語』の開巻「桐壺」の巻は、「長恨歌」の変奏曲といってよいし、『源語』全体を通して、おもなヒロインたちの物語は、殆どが

〈長き恨みの物語〉であるといえる。

ここでは、「桐壺」の巻を除いて語られた〈長き恨み〉の主題を辿ってみることにする。

「長恨歌」の詩句を引いたり、ふまえたりした表現は、「桐壺」の巻以外にも、十前後の巻々に見られる。それらを次に示そう。

①おひさきこもれる、窓のうちなるほどは
 〈帚木、1-170 べ〉
 養在深閨人未識⁽²⁷⁾

②長生殿のふるきためしはゆゝしくて、は
 ねをかさはさむとはひきかへて〈夕顔、1-400 べ〉

七月七日長生殿（中略）在天願作比翼鳥

③ふるき枕ふるき衾、誰と共にかとある所に、

なきたまぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに
 また、霜の華白しとある所に、
 君なくて塵つもりぬるとこなつの露
 うち払ひいく夜寝ぬらむ〈葵、2-462 べ〉

翡翠衾寒誰与共⁽²⁸⁾（中略）魂魄不會来入夢
 鴛鴦瓦冷霜華重⁽²⁹⁾

④深き窓のうちに何ばかりのことにつけてか、かく深き心ありけりとだに知らせたてまつるべき〈若菜上、7-256〉

養在深閨人未識

⑤親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうな

る、心やすきことはなし〈若菜下、7-380ペ〉

養在深閨人未識

⑥柏木と楓との、(中略) 枝さしかはしたるを、いかなる契りにか、(中略)

ことならばならしの枝にならさなむ
葉守の神のゆるしありきと〈柏木、
8-151~2ペ〉

在地願為連理枝

⑦月さし出でて曇なき空に、羽うち交す雁がねも、列を離れぬ〈横笛、8-188ペ〉

在天願作比翼鳥

⑧池のはちすのさかりなるを見たまふに、いかに多かる、などまづおぼし出でらる(中略) 蛍のいと多う飛びかふも、夕殿に蛍飛んで、と、例の、ふるごともかゝる筋にのみ口なれたまへり〈幻、9-164ペ〉

太液芙蓉未央柳 (中略)

夕殿蛍飛思悄然

⑨七月七日も例にかはりたること多く、(中略) 一所起きたまひて〈幻、9-166ペ〉

七月七日長生殿

孤灯挑尽未成眠

⑩大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行方たづねよ〈幻、9-170ペ〉

臨卍道士鴻都客 能以精誠致魂魄
為感君王展転思 遂教方士殷勤覓

⑪世を海中にも、魂のありか尋ねには、心のかぎり進みぬべきを〈宿木、11-213ペ〉

能以精誠致魂魄 (中略) 遂教方士殷勤覓 (中略) 昇天入地求之遍

⑫蓬萊までたづねて、かんざしのかぎりをつたへて見たまひけむ帝は、なほいぶせかりけむ〈宿木、11-301ペ〉

唯将旧物表深情、鈿合金釵寄将去

これら十二例のうち、明らかに〈長恨〉をテーマにしているものは、③、⑧、⑨、⑩の四例で、源氏によって偲ばれている女人は、正妻葵の上と愛妻紫の上である。

次に、故人を通して、その関係者を慕っている例は、⑥、⑦、⑪、⑫に見られる。⑥と⑦は、柏木を通して、その夫人である落葉の宮を、⑪と⑫は、大君を通して、その異母妹である浮舟を思っている。

しかし、これらの例も、故人への〈長恨〉がなしたわざである。夕霧は、柏木に対する落葉の宮の〈恨み〉を、薫は、大君に対する自身の〈恨み〉を凝視している。

また次に、深窓に育った娘時代の楊玉環になぞらえているものに、①、④、⑤があり、①は一般論、④は女三の宮の生活、⑤は紫の上の生活に言及している。

最後に②であるが、ヒロインの夕顔の君は、まだ亡くなっていないが、この文章に続く次の段で頓死する。したがって、②の文章も、夕顔頓死の伏線に相当する記述であり、テーマとしては、まさに〈長き恨み〉であろう。

こうしてみると、「長恨歌」の詩句を引用

したり、それをふまえた表現は、源氏と夕顔の君、源氏と葵の上、源氏と紫の上、柏木と女三の宮、夕霧と落葉の宮、薫と浮舟（大君の形代）の物語であることが確認できる。

そして、これらの人物に、藤壺の宮と匂の宮を付け加えれば、『源語』の主人公格の人物は全員揃ったことになる。

源氏と藤壺の宮、匂宮と浮舟の物語が、「長恨歌」と直結しないのは、両者とも密通の愛であり、夫婦愛（もしくは、それに準ずる愛）ではないからであろう。

前に触れた柏木と女三の宮の物語も、「長恨歌」における〈長恨〉のテーマには到っていなかった。女三の宮の存在が、〈深窓〉の女性、〈深閨〉の人であるという状況の描写でしかなかったのである。これというのも、二人のかかわりは密通だったからであろうか。

また、夕霧と落葉の宮の物語も、背景には柏木と落葉の宮の夫婦の物語が構成されている。〈連理の枝〉も〈比翼の鳥〉も、柏木・落葉の宮夫妻の生前の姿であり、そうしたありようを、自己に重ね見ようとしたのが、夕霧の願望だったのである。

ゆえに、『源語』における〈長恨〉の物語は、夫婦愛、もしくはそれに準ずる恋人同士の相聞譚という主題性を有したものであった。

「長恨歌」において、玄宗皇帝と楊貴妃が永遠の愛を誓うのも、皇帝と后妃という、一對の男女の物語だからである。

以上、〈王昭君〉と〈楊貴妃〉という中国古代の佳人の故事をふまえた『源氏物語』の構想や主題の一端を垣間見てきたが、〈戚夫人〉や〈李夫人〉同様、二人の美人も、皇帝とのかかわりにある后妃・宮女であり、いずれも〈佳人薄命〉の生涯を生きた女人たちである。

これらの基本的条件を、一条天皇の中宮彰子の女房として宮仕えしていた状況下の紫式部が、帝や貴公子と后妃や姫君たちの物語として形象化した。

しかし、それはあくまでも紫式部流にあって、主人公たちの運命に、唐土の佳人たちの生涯を重ね合わせたことが、そのまま、物語全体の主題を〈佳人薄命〉とすることにはならない。

〈王昭君〉は主として貴種流離譚という構想の面で、また〈楊貴妃〉は主として長恨という主題の面で、『源氏物語』における主人公の運命や、主人公が愛惜した人たちの生涯に投影されたのであった。

【注】

- (1) 拙稿『『源氏物語』と中国の女人たち』
 (『創価大学創立二十周年記念論文集』所収)
- (2) 『四大美人艶史』(甘時雨、黄山書社出版)
- (3) 『史記』、『漢書』、『後漢書』、『三国志』、『十八史略』等に、西施や貂蟬の名は見られないが、詩や小説には登場している
- (4) 『漢書』「元帝紀第九」(中華書局)
- (5) 『漢書』「匈奴伝第六十四下」(中華書局)
- (6) 同上
- (7) 『後漢書』「南匈奴列伝第七十九」(中華書局)
- (8) 『西京雜記』卷二(欽定四庫全書)
- (9) 『世説新語』下「賢媛第十九」(新釈漢文大系、明治書院)
- (10) 『唐代伝奇』「周秦行紀」(新釈漢文大系、明治書院)
- (11) 『源氏物語評釈』第三卷(玉上琢弥、角川書店) 118~119ページ、以下『源氏物語』本文の引用は、本書により〈3-118~9べ〉のように記す
- (12) 『和漢朗詠集』「王昭君」(日本古典文学大系、下線部筆者)
- (13) 注(8)に同じ
- (14) 李白の詩は、『古文真宝』〈前集〉上(新釈漢文大系、明治書院)により白居易の詩は、『白氏文集』三(新釈漢文大系、明治書院)による(下線部筆者)
- (15) 欧陽永叔と王介甫の詩は、『古文真宝』〈前集〉下(新釈漢文大系、明治書院)による
- (16) 日本古典文学大系(岩波書店)
- (17) 注(9)の劉注参照
- (18) 『文選』〈詩篇〉下(新釈漢文大系、明治書院)
- (19) 『十八史略』下「卷五唐」(新釈漢文大系、明治書院)
- (20) 同上
- (21) 同上
- (22) 同上
- (23) 『白居易』下(中国詩人選集、岩波書店)
- (24) 『中国四千年の女たち』(飯塚朗、時事通信社)
- (25) 『唐代伝奇』「長恨伝」(新釈漢文大系、明治書院)
- (26) 注(19)に同じ
- (27) 「闌」を「窓」とする『白氏文集』七十巻本が存在したという(『源氏物語講座』第八巻、「源氏物語の源泉 III 漢文学」、丸山キヨ子、有精堂)、なお「長恨歌の引用は、注(23)の本文による
- (28) 同上
- (29) 同上

『源氏物語』における中国の美人たち（摘要）

西 田 禎 元

『源氏物語』の作者として名高い紫式部は、中国の史書や詩文に造詣の深い女性であった。長篇『源氏物語』には、『史記』や『白氏文集』から引いた文句や、それらをふまえた表現が、ここかしこに見られる。

そうした中で、女性である作者は、中国史上（漢代から唐代）のヒロインたちに、特に興味関心を示しているようである。そのヒロインたちは、漢代の戚夫人、李夫人、王昭君、それに唐代の楊貴妃などであった。

作者は、皇帝とのかかわりにあった后妃や宮女における運命の悲劇を、物語の構想や主題にからませている。

王昭君と楊貴妃は、中国四大美人の中の二人であるが、彼女たちの波乱にみちた悲劇の人生を、紫式部は〈貴種流離譚〉の構想と〈長恨〉の主題に応用した。

『源氏物語』と中国古典文芸とのかかわりは深い。